

「あいち国文」第十四号をお届けいたします。

世界を席卷したコロナ禍は、本号の編集にも波及し、大幅な遅れと、内容に変化をもたらしました。

本号を構成する論考六篇の中、長年その研究に携わってこられた「古学思問」の片山氏以外、総て若手の投稿でした。若年層の参加に未来への希望が膨らみます。

『存在感』ではオランダ在住のモーレンカンブふゆこ氏によるエッセイ「うたと共に」が注目されます。個々の抒情が「うた」の形を借りて細やかに、あるいは端的に表現され、さらにそれらが繋がって活きた人間が形成されています。そこには完成した文学の重量感が存在しているのです。

また、「続学舎叢書」翻刻、「あいち国文のあゆみ」は創刊号からの連載です。表紙、裏表紙もその解説と共に必見の対象です。ともに蒐集に当たった先人の努力と成果を示す貴重図書を紹介しています。

振り返ればこの一年は、自粛や分断が要求される異常社会でした。しかし、行動の不自由から時間の余裕が生まみ出される可能性も見逃せません。歩を止めて己を見つめ、自己の確立に努める機会かもしれません。ささやながら「あいち国文」は、それらを表現する場を設けています。次号も民主主義の象徴として、個性に溢れた文花の花で飾られることを願っています。

長谷川文子

編集委員（〇印は委員長）

浅井圭子 片山武 加藤彩 狩野一三 熊澤美弓

小谷成子 小林宗治 杉浦邦子 鈴木喬 都築千枝子

名倉ミサ子 野崎典子 〇長谷川文子 山口比砂

山下達治 湯本明子（世話係） 洲脇武志